ぼくの彼女は若妻女子高生
ときめき新婚ハーレム

早瀬真人
挿絵／翔丸

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

Contents

目次

第一章　美少女のムッチリ太腿とヒップ……4
第二章　女子大生お姉さんとの初体験……57
第三章　美人女教師のエッチな性指導……93
第四章　豊満未亡人のふしだらな手コキ……132
第五章　お姉さんたちの甘美なお仕置き……177
第六章　永遠へと続く性宴……241

登場人物 *Characters*

村上 太一
(むらかみ たいち)

おっちょこちょいで、性欲旺盛な十八歳の童貞少年。幼馴染みの佳奈子と結婚の約束を交わしており、早くエッチすることを夢見ている。

二宮 佳奈子
(にのみや かなこ)

健康的なムチムチボディにロングヘアーが似合うベビーフェイスの高校一年生。太一の許嫁。一途でまじめな性格で、結婚願望が人一倍強い。

二宮 由貴子
(にのみや ゆきこ)

佳奈子の実母の三十五歳。七年前に夫を亡くした未亡人で、女手一つで一人娘を育てている。優しく大らかで包容力があり、心身ともに成熟した女性。

須藤 美希
(すどう みき)

佳奈子の父方の従姉で女子大三年生。由貴子の経営するアパートに下宿している。明るい性格に茶髪ぎみのセミロングボブが映えるコギャル風の女子大生。

沢村 和恵
(さわむら かずえ)

由貴子の実妹の二十七歳。太一と佳奈子の通う高校の教師で、由貴子のアパートに住んでいる。肉感的でＧカップ以上の巨乳が目を引く、恋愛経験豊富な大人の女性。

第一章　美少女のムッチリ太腿とヒップ

1

雲一つない、爽やかな晴れの日が続く五月中旬のこと。
村上太一（むらかみたいち）は満を持して、自分の部屋にガールフレンドの二宮佳奈子（にのみやかなこ）を招いていた。
太一は私立の盟蘭（めいらん）高等学校に通う三年生で、今年十八歳を迎えた健康優良児だ。
佳奈子はおとなりに住む幼馴染みで、同じ高校に通う二つ年下の愛くるしい美少女だった。
二人は幼い頃から結婚を誓い合った仲であり、親公認の間柄でもある。
（今日こそは、絶対に初エッチを決めてやるぞ！）
佳奈子の高校入学後、太一は彼女と初体験を済ませる約束を交わしていた。
これまでにも何度かチャンスはあったものの、タイミングや都合がどうしても合わず、延び延びになっていたのである。
今日は太一の両親が揃って外出しており、この日の機会を逃すわけにはいかない。

二人のあいだには早くも微妙な雰囲気が漂っており、交わす会話もどこかぎこちなかった。

学校帰り、「ちょっと寄ってかない？」という何気ない誘いだったこともあるが、佳奈子のそわそわした態度を見る限り、どうやら彼女もかなり意識しているようだ。

「太一君のおじさんやおばさんは、いつ旅立つの？」

重苦しい空気に耐えられなくなったのか、佳奈子がジュースをひとくち呑んだあと口を開く。

「え？　うん、ひと月後だよ。今日は、いろいろな手続きに行ってるんだと思う」

太一の父親は商社マンをしており、仕事の都合で来月から三年間の予定で海外に赴任することが決まっていた。母親も同行するため、太一は念願だった一人暮らしを始めることになる。

これからは親の目の行き届かないところで、いくらでも好きなことができるのだ。夜更かし、朝寝坊、夜遊びはもちろんのこと、仲のいい友だちを自分の都合のいいときに呼ぶこともできる。遊びたい盛りの少年が、浮かれてしまうのも無理はなかった。

（それに……佳奈子だって）

ベッドのサイドを背に、マンガ本に目を落としている幼馴染みを、太一は上目遣いで見つめた。
ぱっちりとした瞳に小さな鼻、ツルツルの頬にぷっくりと膨れたさくらんぼのような唇。それらが卵形の顔にバランスよく配置され、見る者に心地よささえ与えていたが、ベビーフェイスの容貌は理屈抜きでの愛くるしさを存分に誇っていた。
黒艶を放つストレートのロングヘアーも目を惹いたが、佳奈子の魅力はそればかりではない。
セーラーの胸元を膨らませるふっくらとしたバスト、短めのプリーツスカートから覗くむちっとした太腿は、少年の性欲を煽るだけの蠱惑さを放っていたのである。
（佳奈子の魅力って、やっぱり少女のような顔立ちと、エッチな身体つきとのアンバランスさにあるんだろうな）
これまで幼馴染みの裸体を想像し、何度自慰行為を繰り返してきたことだろう。
一糸纏わぬヌードを早く見たい。そしてふくよかな柔肌に触れてみたい。
すでに太一の股間はいきり勃ち、ズボンの前部分を大きく膨らませていた。
両親が旅立てば、いつでも自宅へ誘えるのだが、それまで待ちきれそうにない。
太一は生唾をゴクリと呑み込むと、心臓の鼓動を昂らせながら佳奈子にゆっくりと

寄り添っていった。
「ん？　何？」
顔を上げた少女の瞳に、やや動揺の色が走る。太一の顔は眉が吊りあがり、まるで猛禽類のような目つきになっていた。
「か、佳奈子」
震える声で呼びかけながら、キスをしようと顔を近づけていく。
「ちょ……ちょっと」
一瞬顔を引いた佳奈子だったが、唇が重なり合うと、そっと目を閉じていった。
柑橘類の甘酸っぱい香りと味覚が、口中に広がっていく。
ファーストキスは一年前に済ませており、その後も何度か経験していたが、いつもソフトなキスばかりに終始していた。
今日の太一は、初めてのディープキスを仕掛けるつもりで、舌先を唇の狭間へと滑り込ませた。
ピンク色の歯茎や真っ白な歯を舌でなぞったあと、佳奈子の口腔へと潜り込ませ、レモン味の唾液を搦め捕る。
「ん……む……ぅン」

拙い動きながらも、ねっとりとした舌に自身の舌を重ねると、少女は鼻から甘い吐息を洩らした。
（だめだ。もう止まらないよぉ）
牡の本能が脳裏を支配し、脳漿が沸騰したようにグラグラと煮え立つ。
キスだけにもかかわらず、勃起はズボンの奥で突っ張り、すでに前触れの液さえ溢れ出しているようだ。
無意識のうちに少女のバストへと指を伸ばした太一は、手のひらを押し返してくる弾力感に色めき立った。
（あぁ、柔らかい。おっぱいって、こんなにふっくらしてるんだ。それに思ったよりも大きいぞ！）
乳房の周辺から包み込むように揉みしだいていくと、佳奈子はさらにくぐもった声を発してくる。
「ふ……ぅぅン」
薄目を開けると、少女の頬はすでに桜色にうっすらと染まっていた。
佳奈子も、きっと昂奮しているに違いない。ガールフレンドの表情を見た瞬間、太一の性衝動はついにリミッターを振り切った。

右手を下ろし、プリーツスカートを捲りあげ、剥き出しになった生足に手のひらを滑らせる。
（あぁっ。ツルッとしてて気持ちいい。ちょっと汗ばんでいるのか、肌が指に吸いついてくるようだ！）
太一は鼻息を荒らげながら、当然のごとく、指を乙女の秘園へと這わせていった。
いったい、どんなパンティを穿いているのだろう。すでに愛液で濡れているのだろうか、そして少女の恥芯はどんな形、どんな色艶をしているのだろう。
性的な好奇心に苛まれた太一の指先は、湿った空気が充満する佳奈子のスカートの中を邁進していった。
「あンっ……だめっ」
内股沿いに突き進んでいた指が花園に到達するまで、あと数センチ。佳奈子は太腿を閉じると、眉尻を下げながら唇を離した。
気勢を削がれた太一の前でスカートの乱れを直し、半身の体勢で横を向く。
「ど……どうして？」
「だって……まだ心の準備が」
「や、約束したじゃないか。佳奈子が高校に入学したら、結ばれようって」

女の子の心境は、何とも複雑怪奇である。火照った身体、しっとりと濡れた瞳を見れば、佳奈子もその気たっぷりに思えるのだが、どうやら男のように単純なものではないらしい。

「確かに約束はしたわ。でも学校帰りだし、あまりにも唐突すぎて。それに……いつおじさんたちが帰ってくるかわからないでしょ？」

言われてみれば、ガールフレンドの言い分はもっともだ。

佳奈子は昔から潔癖性できれい好きだったが、彼女はまだシャワーさえ浴びていないのである。この状態で初体験を迎えるには、やはり納得できないものがあるのだろう。それでも、太一の性的昂奮が鎮火することはなかった。

今は佳奈子の愛らしさや心の底から好きだという思いよりも、性衝動のほうが圧倒的に勝っている。男の性欲は一度タガが外れたら、行き着くところまで行くしかないのだ。

「僕、もう我慢できないよ！　だって……なかなか二人きりになれる時間がなくて、ようやくこの機会が来たんだから」

切な顔で迫ると、佳奈子はいかにも困惑そうな表情を見せる。そしていったん目を伏せたあと、つぶらな瞳を向けてきた。

「おじさんたちが海外へ行ったら、いくらでも自由な時間ができるでしょ？　そのときは、絶対に私のバージンを太一君にあげるから」
「で、でも……」
太一が無意識に視線を落とすと、学生ズボンの中心部はいまだ小高い三角の頂を見せている。
「……やだ」
勃起の膨らみを見た佳奈子は、眉根を寄せ、頬をポッと赤らめた。
「あ……ご、ごめん」
股間を両手で隠すと、少女は慌てて視線を逸らす。そしてしばし間を置いたあと、躊躇いがちにぽつりと告げた。
「やっぱり我慢……できない？」
「え？　う、うん。でも……佳奈子がどうしても嫌だって言うんなら……」
「手で……してあげようか？」
突然放たれた、ガールフレンドの言葉が信じられない。太一がぽかーんとしていると、佳奈子は恥じらいながら顔を向けた。
「手だったら、してあげられると思う」

猛烈な感動が込みあげてくる。これまで佳奈子相手に様々な妄想を抱いてきたが、手コキも何度頭に思い描いたことか。それが、今現実のものとなるのだ。

互いに童貞と処女同士。しょっぱなからセックスに及んで、うまく結ばれるのかという不安も少なからずある。

（相手は、経験豊富な女の子じゃないもんな。だったら、下準備のレッスンもある程度は必要かも）

そう考えた瞬間、太一のペニスはパンツの中で再び大きな脈動を打った。

ガールフレンドに恥部を見られるという羞恥はあったものの、このままお預けではどうにも収まりがつきそうにない。

「ほ、本当に手でしてくれるの？」

コクリと小さく頷く美少女を目にした瞬間、太一は自ら学生ズボンのベルトを外していた。

下半身の熱い昂りは、痛いほど反り返っている。ホックを外し、チャックを引き下ろした瞬間、佳奈子は太一の真横へと寄り添ってきた。

潔癖な少女にとっても、男性器への興味は多少なりともあるのかもしれない。

爛々とした瞳が股間に注がれると、さすがの太一も怯んだ。

「や……やっぱり恥ずかしいな」
「じゃ、やめとく？」
エッチが中止になったということで、すっかり心に余裕を持った佳奈子は、悪戯っぽい笑みを浮かべながら太一の顔を覗き込んでくる。
（確かにあそこを晒すのは気が引けるけど、エッチをするときはどうせ真っ裸になるんだし、そのときは僕だって佳奈子の大切なところを見ることになるんだから）
太一は意を決すると、腰を浮かせ、学生ズボンをパンツごと引き下ろしていった。
下着の中で抑え込まれていた男の肉が、弾けるように飛び出してくる。その瞬間、佳奈子は目を大きく見開き、びっくりしたように右手を口元へと当てた。
ペニスは完全勃起の様相を呈し、肉胴には無数の青筋が巻きつくように浮き出ている。亀頭は半分ほど包皮が被っていたが、先端からは先走りの液が溢れ出し、今にも破裂するかのごとくパンパンに張り詰めていた。
（あぁっ！）
身を八つ裂きにされそうな羞恥心が込みあげてくる。自分でもグロテスクと思える異形の物体を、愛くるしい美少女に直視されているのだ。
「嘘っ……こ……こんなになっちゃうの？」

横目で佳奈子の様子を窺うと、上半身を起こし、今度は両手で口を覆っている。そして再び上体を屈めると、ひくつく男性器をまじまじと見つめた。
「痛くないの？」
「え？　う、うん」
「すごい大きい。こんなの……きっと入らないよ」
「そ、そうかな？」
勃起時のペニスを、他人と比較したことなど一度もない。
自分の逸物が大きいか否かの判断はできなかったが、ガールフレンドの放った「入らないよ」という言葉に、太一は過敏に反応した。
（佳奈子は決して背が高いほうじゃないし、もし僕のチンポが人より大きいんだとしたら、確かにスムーズな初体験とはいかないかも）
何と言っても二人はエッチ未経験、最初からうまくいくほうがおかしい。
太一は一瞬困惑したものの、ペニスの先端に走る違和感に腰をピクリと震わせた。
佳奈子が人差し指を伸ばし、鈴口に溜まったカウパー氏腺液を指腹で掬い取ったのだ。
「あ……くっ」

たったそれだけの行為で、快感の微電流が背筋を走り抜ける。
「先っぽが……濡れてる」
「こ、昂奮すると出てくるんだよ。女の子だって、気持ちよくなると愛液が出てくるでしょ。それと同じだよ」
太一の言葉には答えず、佳奈子は糸を引く透明な粘液を不思議そうに見つめていた。腰の奥底で停滞していた快感が再び息を吹き返し、切なげな欲情が脳裏を占有しはじめる。美少女に恥部を凝視されているという状況だけで、このまま射精してしまいそうだ。
ビクビクとしなる若茎を見下ろしながら、太一は狂おしそうに腰をくねらせた。
早くペニスを握ってほしい。柔らかい指で、猛烈にしごいてほしい。
「か、佳奈子……あの」
熱い眼差しで懇願すると、それまでペニスを見つめていた少女は、初めて太一の顔を仰ぎ見た。
八の字にたわんだ眉、潤んだ瞳、半開きになった口。おそらく今の自分は、捨てられた子犬のような顔つきをしていることだろう。
ボーイフレンドの心の内を読み取ったのか、佳奈子は興味津々の視線を剛直に戻し、

指をゆっくりと伸ばしていった。
ぷっくりとした指腹が、絡みつくように肉筒へとまとわりついてくる。その瞬間、激しい射精願望に衝き動かされた太一は、慌てて会陰を引き締めた。
「く、くぅぅぅう」
無意識のうちに腰が小さくバウンドし、全身の筋肉が硬直してしまう。放出の瞬間を何とかやり過ごすと、太一は涙目でホッとひと息ついた。
そんなボーイフレンドの様子といななく怒張を、佳奈子は交互に見つめている。そして、ゆったりとした動きで肉胴をしごいていった。
「は……あぁぁっ」
「……気持ちいい？」
「き、気持ちいいよぉ」
自分の手でするオナニーとは比べ物にもならない。異性の指の感触がこれほどの快感を喚起させるとは、太一自身もまったく予想していなかった。
知らずしらずのうちに腰をくねらせ、両膝を忙しなく擦り合わせてしまう。射精を抑制しようにも、欲望のマグマが射出口へ向かって怒濤のように荒れ狂う。
鈴口から源泉のように溢れ出た前触れ液が、肉胴に向かって滴り落ち、少女の白い

指を瞬時にして穢していった。
指の隙間に滑り込んだ粘液が、ニッチャニッチャと卑猥な音を響かせる。それが太一の性感を苛烈に煽りたてていった。
佳奈子は瞬きもせずに、小さな脈動を続けるペニスを見守っている。その瞳はしっとりと潤み、心なしか頬も上気しているようだ。
かわいらしい赤い舌が乾いた唇をなぞりあげると、太一は上半身をやや屈め、佳奈子の背中に回していた左手を下腹部へと伸ばしていった。
手コキが始まってから、まだ三分も経過していない。このまま射精したのでは、あまりにももったいないというものだ。
太一は少しでも気を逸らそうと、プリーツスカートの裾を掴み、ゆっくりとたくし上げていった。
美少女は手淫に夢中になっているのか、拒否の姿勢を見せてこない。そのまま手を目いっぱい伸ばすと、指先が蕩けるような柔肌の感触を捉えた。
（ふ、太腿の付け根のほうだ！　まるでマシュマロみたいに柔らかい!!）
目測で三角地帯の隙間に手を潜り込ませた瞬間、指先が下着の布地越しに湿った温もりに触れる。それは少女が性的昂奮をしている事実を如実に表していたが、佳奈子

はこのとき初めて内股に力を込めた。
「あ……太一君、だめ」
「か、佳奈子も……濡れてる」
「いやンっ」
丸いヒップをくねくねと揺らす仕草が、さらに少年の性感上昇に拍車をかける。
肝心の部分は佳奈子の身体に遮られて見えなかったが、太一は愛液で滲んだ箇所を中心に指を蠢かせた。
「だめっ……だめよ。あンっ」
美少女が瞼を閉じ、細い顎をクンと突きあげる。
(感じてる！　佳奈子も感じてるんだ！)
清楚で愛くるしいガールフレンドも、エッチに興味があることは以前から薄々気づいていた。下ネタにはさすがに眉を顰めていたものの、決して生理的嫌悪を抱いているとは思えなかったのである。
(ひょっとすると、このまま最後までイケるんじゃないか⁉)
一度はあきらめかけた初体験への思いが、夏空の雲のように膨らんでくる。思わず鼻息を荒らげた太一だったが、その直後、思いがけない出来事が起こった。

乙女の恥芯に生じた快感をこれ以上知られたくなかったのか、佳奈子は突然ペニスを握り込む指に力を込め、猛烈な勢いでしごきたててきたのである。
「あっ！　ちょっ……」
自分の意思とは無関係に、怒張が激しい脈動を始める。亀頭を覆っていた包皮が、蛇腹のような動きを見せ、張り出した雁首を強烈に擦りあげる。
「あぁ……だめっ。イクっ……イクぅぅう」
太一は腰を浮かせると、深奥部に溜まった欲望の塊を一気に吐き出した。
「きゃっ！」
こってりとした白い粘液が、ほうき星のように噴出していく。一発目は一メートル近く跳ねあがり、二発、三発目も勢いは衰えず、ありったけの樹液を放出するかのごとく、フローリングの床へと立て続けに連射していった。
佳奈子は少年の凄まじい射精を、もはや呆然とした顔つきで見つめている。
すでに手の動きは止まっていたが、それでも射精が続いていることが信じられないといった表情だ。
「はぁ……はぁ、はぁ」
精液が緩やかな放物線を描きはじめ、ようやく噴出が終焉を迎えると、太一はまる

で百メートルを全速力で走ったあとのように喘いでいた。
大股開きで下半身を剥き出しにした姿がみっともないとはわかっていたが、全身に拡散していく快楽と脱力感にただ身を委ねることしかできない。
「精子って……こんなにたくさん出るんだ」
佳奈子の感嘆の溜め息さえ耳に届かず、太一は蕩けるような喜悦に打ち震えていたが、その直後、夢から覚めたように生気を取り戻していった。
「太一、いるの？」
（えっ？　か、母さん!?）
扉をノックする音が聞こえ、母親の声が聞こえたと同時にドアノブがゆっくりと回される。
「あ、あっ」
慌てて股間を両手で隠そうとした刹那、無情にも扉は開け放たれ、母親の唖然とした顔が視界へと飛び込んできた。

2

その日の夜、太一の自宅では家族会議が開かれ、すぐさま父親の雷が落とされた。
「バカもの！　学生の分際で、何をやっとるか。いくら許嫁の間柄とはいえ、まだ早すぎる！」
ふだんは温厚な性格の父だったが、もともと地声が大きく、怒るとさすがに迫力がある。両親と佳奈子の母である由貴子（ゆきこ）の前で、太一は正座状態のまま頭を垂れていた。
（あ～あ。まさか、こんなに早く帰ってくるなんて。もう最悪だよ）
母親からは午後六時過ぎ頃に帰るという話は聞いていたが、どうやら予定より早く用事が片づいたようだ。
半勃ち状態のペニス、床に飛び散った精液を実の母に見られたことを思い出すと、恥ずかしさで胸が張り裂けそうだ。同時に佳奈子に対しても、申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。
母親にふしだらな場面を見られたあと、愛しいガールフレンドは子供のように泣きじゃくった。
太一は股間を隠しながら、ただおろおろするばかりだったが、相手はつい最近まで中学生だった女の子。当然、これは男の責任である。
（やっぱり佳奈子の言ったとおり、父さんや母さんが家を離れてから、エッチすれば

よかったんだ）

まさしく後悔先に立たず。自分の愚かさ、浅はかさが恨めしく思えてしまう。

「まあ……しかし、最後の一線までは超えてなくてよかった。もう一度聞いておくが、本当に佳奈子ちゃんとは、以前からもそういう関係にはなっていないんだな？」

「……うん。彼女に確認してもらえればわかると思う」

太一はシュンとしながら、ガールフレンドの母親の顔を恐るおそる見遣った。

由貴子は三十五歳、七年前に夫を亡くした未亡人で、女手一つで一人娘を育てている。亡き夫の保険金と敷地内に母屋とは別に建てた一戸建てをアパート代わりにし、家賃の収入で生計を成り立たせていた。

涼しげな目元、いつも笑みを絶やさない大らかな性格。おっとりとした口調とともに他人に見せる優しさや配慮は、いわゆる癒やし系のキャラだった。

年齢を感じさせない若々しい容貌と、豊満という表現がぴったりのグラマラスな肢体。太一も子供の頃から由貴子のことが大好きだったが、今日ばかりはまともに顔を見ることができない。

娘を傷ものにされたと、怒りを露にしているのではないか。交際禁止を口にしてくるのではないかという恐怖が襲いかかってくる。

（そんなことになったら、泣くに……泣けないよ）
太一は由貴子に向き直ると、椅子から下り立ち、頭を床に着けて土下座の姿勢で謝罪した。
「おばさん、ごめんなさい！　でもこれだけは信じてください‼　ぼ、僕、佳奈子ちゃんのことは真剣に好きなんです！　決していい加減な気持ちじゃありません‼」
とにかく、できる限りの誠意は見せなければならない。床に額を押し当てたままでいると、おっとりとした声が頭上から響いてくる。
「太一君、頭を上げて。確かに佳奈子は子供っぽいところがあるけど、もう高校生だし、太一君だけが悪いんじゃないと思うの。あの子の意思だってあったと思うわ」
「いえ、すべて僕が悪いんです！　十分に反省していますので、こ、交際禁止だけは許してください！」
太一が顔面を真っ赤にしながら償罪の言葉を述べると、由貴子は朗らかそうな笑い声をあげた。
「いやだわ。そんなこと考えてないわよ。佳奈子は昔から太一君のことが大好きだったし、私だって二人が一緒になってくれたらと、ずっと考えていたんですもの」
「そ、それじゃ！」

喜悦に溢れた表情で顔を上げた太一に、由貴子は涼しげな微笑を送ってくる。
ホッとしたと同時に、緊張感から解き放たれた太一は大きな溜め息を吐いた。
「由貴子さん、本当にごめんなさいね。うちのバカ息子が、とんでもないことしちゃって」
「いえいえ。太一君が嘘のつけない優しい男の子だっていうことは、私もよく知ってますから」
母親の謝罪の言葉にも、由貴子は如才のない対応を見せてくる。
彼女の懐の広さに、改めて感謝しなければと考えた太一だったが、一難去ってまた一難。今度は、父親がとんでもないセリフを投げかけてきた。
「まあ息子の一人暮らしに関しては、私たちも気にはかけていたんですが、やはり心配が現実となってしまいましたな。ちゃんと手を打っておいてよかった」
「え？」
何のことかと小首を傾げると、父は意味深な笑みを浮かべる。
「この家は、知人に貸すことになったからな。今日は、その話で出かけていたというわけだ」
「そ、そんな……。じゃ、僕はどこに住むの？」

「お前は、由貴子さんのアパートに移ることになる。知人からの家賃代は、そのままお前の生活費へと回されるわけだ」
びっくり顔で由貴子に視線を向けると、彼女はすでに承諾しているのか、小さくコクリと頷いた。
いったい両親と由貴子とのあいだで、いつそんな話がされていたのだろう。
広い自宅での一人暮らしを想定していた太一にとって、これは奈落の底へと叩き落とされるぐらいのショックだった。
「ぼ、僕の意見も聞かずにひどいよ！」
「何がひどいだ。お前はまだ高校生だし、親の管理下にあることは違いないんだぞ。ましてこのていたらくじゃ、反論する資格などないんじゃないか？」
確かに父の言うとおりだった。佳奈子との淫らな行為を知られてしまった以上、強いことは何も言えない。
押し黙ったままの太一を、父は承服したと受け取ったのか、初めてホッとしたような顔を見せたが、事はこれだけに留まらなかった。
「これで安心して家を離れることができるが、こんな調子じゃ由貴子さんも不安だろうし。太一！　佳奈子ちゃんと中途半端な関係を続けているより、どうせなら結婚し

たらどうだ？」
「へ？」
聞き間違いではないのか。悲愴な表情から一転、太一はまるで鳩が豆鉄砲でも喰らったような顔つきへと変わっていた。
「結婚は親の承諾があれば、男なら十八歳、女なら十六歳からできる。お前は先月の誕生日で十八歳になったし、佳奈子ちゃんは七月の末には十六歳になるらしいじゃないか。そうなれば、めでたく結婚ができるというわけだ。二人が一緒になれば、私たちも由貴子さんも安心だろ？」
さすがに開いた口が塞がらない。昔から放任主義の両親だったが、いくら何でもこれは無茶すぎる。
由貴子に再び視線を向けると、彼女はやや困惑げながらも、すでに父とは事前に話し合っていたのか、無言のままだった。
「か、佳奈子ちゃんは、知っているんですか？」
「……さっき話したわ」
「な、何て言ってました？」
「飛びあがって喜んでたわ。あの子はパパっ子だったでしょ？　父親を早くに亡くし

たせいもあって、結婚願望も人一倍強いみたいなの。それ以上に太一君のこと、ホントに好きなのね」
「お前はどうなんだ？　佳奈子ちゃんのことは大好きだと言ったな？」
「もちろん好きだよ。でも……」
「つまり、男としての責任を取るということだな。よし、これで決まった！　母さん、ビールを持ってきてくれ。由貴子さん、二人の前途を祝して乾杯しましょう」
細かいことにこだわらない性格の母も、満面の笑みを浮かべながら席を立つ。
（ぼ、僕が佳奈子と結婚⁉　まだ高校三年生なのに？）
あまりにも現実離れした展開に、太一はただポカーンとするばかり。まるで狐につままれたようだった。
こうしてひと月後、両親は婚姻届と結婚の同意書を由貴子に手渡し、海外へと旅立っていったのである。

3

太一はがらんとした自分の部屋を見て、感慨に耽っていた。

机やベッドを始め、身の回りの生活品は、すでに由貴子のアパートの自室へと運び込んでいる。

（家を人に貸しちゃった以上、おいそれと荷物を取りに戻ってくることはできないもんな）

父の知人一家は、三日後に引っ越してくる予定になっていた。

すでに彼らとは挨拶だけは済ませていたが、三年間は自宅へ足を踏み入れることはできないのだ。

「そろそろ、いいでしょうか？」

「あ、はい」

仲介の不動産屋の呼びかけに返答したあと、太一は十八年間の思い出が詰まった家をあとにし、その足で由貴子の家へと向かった。

（とりあえずは、荷物の整理をしないと。それにしても……佳奈子とこんなに早く結婚することになるなんて）

佳奈子は、ふた月後には十六歳の誕生日を迎える。婚姻届と親の同意書を役所に提出すれば、二人は晴れて夫婦になるのである。

どうにも実感が湧かず、太一は首を捻りながら由貴子の家の門扉を開けた。

「今日から、ここが僕の住む家か」

敷地内には真正面に瓦葺きの日本家屋の母屋と、左側面にモルタル調の小洒落た一軒家が建てられている。

この建物は、もともと佳奈子が将来結婚したときに住めるよう、今は亡き父親が建てたものだが、それまで空き家にしておくのはもったいないと、賃貸アパートとして使用していた。

基本的に女性限定であり、普通のアパートの造りとは違うので、自然と身内や知人関係の知り合いが入っていたようだ。

現在、このアパートに居住する間借り人は二人。

佳奈子の父方の従姉で女子大三年生の須藤美希と、由貴子の実妹で太一の通う高校の英語教師である沢村和恵が住んでいた。

各部屋は鍵をかけられるが、リビングやトイレ、風呂などは共同で、もしここで佳奈子との新婚生活が始まれば、男一人女三人の、まさにハーレム状態ということになる。

（考えてみれば、けっこうおいしいシチュエーションだよな。佳奈子と結婚したあとは、いったいどうなるんだろう。同じ部屋に住むことになるのかな。もしかすると、

僕が母屋のほうに移ることになるのかも）

太一はあれこれと思いながら、玄関の扉を開け、靴を脱いで上がりがまちへとあがった。

リビングから快活な女性の笑い声が聞こえてくる。佳奈子がいるのではないかと考えた太一は、ゆっくりと居間へ近づいた。

予想に反し、キッチンテーブルを挟んで美希と和恵が談笑している。

「あら？　太一君」

美希の呼びかけに、太一ははにかみながらペコリと頭を下げた。

美希は現アパートに住みはじめてから三年目を迎え、佳奈子を介して何度も面識がある。身長は佳奈子よりやや高いくらいなので、百六十センチほどだろうか。

全体的にはスリムな体型をしていたが、茶髪ぎみのセミロングのボブヘアーがとても似合っている。性格は明るく、ややコギャル風の、いかにも今どきの女子大生という感じだった。

対して和恵は実姉の由貴子と違い、目のぱっちりした美人タイプ。身体つきは肉感的だったが、ヒップの大きな姉とは正反対に、Gカップはあるのではないかと思えるほどの巨乳が目を惹くお姉さんタイプだった。

ややウェーヴのかかったセミロングの黒髪が、何とも大人の女性の魅力を醸し出している。

英語教師でありながら、太一と佳奈子が所属するテニス部の顧問でもあり、学校ではほぼ毎日にように顔を合わせている間柄だった。

「こ、これから、この家に住むことになりました。どうぞよろしくお願いします」

「やだ。妙にしゃちほこばっちゃって。いつもの太一君らしくないわよ。緊張してるのかな？」

今度は和恵が意味深な笑みを送り、太一は思わず口元を引き攣らせた。

「そりゃ緊張もするわよ。……ねっ？」

どうやら二人は、すでに太一と佳奈子の結婚話を知っているようだ。

「あ、あの……そのことは」

「大丈夫よ。姉さんから、絶対に他言しないでって言われてるから。こんなことが知られたら、あっという間に学校中に広がっちゃうし、他の生徒たちへの影響を考えると、やっぱり内緒にしておいたほうがいいわ」

教師然とした和恵の意見に安心したものの、二人の蠱惑的な女性としばらく同居するのかと思うと、どうにも気持ちが落ち着かない。

「あの……佳奈子は？」
「母屋のほうよ。こちらこそ、これからよろしくね」
「はい。よろしくお願いします。それじゃ……僕、部屋の整理をしますんで」
和恵と美希の好奇の目に耐えられず、太一は逃げるようにリビングをあとにした。
（この状況で佳奈子と新婚生活って……どう考えても無理があるよな。やっぱり母屋で暮らすことになるのかな）
太一の部屋は二階の一室、和恵の部屋のとなりにある。美希は一階の和室を使用していたが、その真向かいの客間は空き部屋になっていた。
太一と佳奈子はまだ夫婦ではないので、一つ屋根の下で暮らせないのも致し方のないことだとはわかっていたが、結婚後の生活を考えると、やはり一抹の不安を覚えてしまう。
「とにかく、部屋の整理はしておかないと」
太一は階段を昇り、一番奥の部屋へ入ると、運び込んでいた段ボールの箱を一つずつ開けていった。
教科書や本を取り出し、棚に並べたあと、洋服や下着類をチェストの中へと入れていく。念願の一人暮らしではあったが、どうにも単なる下宿人という印象は拭えない。

（高校を卒業したら働くつもりだし、もし居づらいようだったら、他にアパートを借りてもいいかも。でも……おばさんや佳奈子は賛成してくれるかな）

どうせ結婚するなら、たとえ短期間のあいだだけでも、二人だけの甘い新婚生活を送りたい。

（和恵先生や美希さんがこのアパートを離れてから、またここに戻ってきたっていいんだもんな）

これからの新生活を夢想していると、階段を軽快に昇ってくる足音が聞こえてくる。

「佳奈子かな？」

太一は顔をパッと輝かせたあと、悪戯っぽい笑みを浮かべながら扉の真横へと走り寄った。

ドアを軽くノックする音が聞こえてくる。

「どうぞ」

扉が静かに開けられた直後、太一はほくそ笑みながら、入室してきた人影を力いっぱい抱きしめた。

「佳奈子！」

「きゃっ！」

（あれ？）
両腕は乳房の下あたりに巻きついていたが、どうにも抱き心地が違う。佳奈子の胸は大きかったが、釣り鐘状にドンと突き出たバストは比較にならないほどのボリュームがあり、胴回りも肉厚だ。
慌てて目を開けた太一の視界に映り込んだのは、佳奈子ではなく、母親の由貴子だった。
「あっ！　す、すみません！　佳奈子ちゃんと間違えちゃって」
「もう……びっくりしたわ」
成熟の未亡人は頬をやや桜色に染め、甘く睨みつけてくる。
「本当に申し訳ありません！」
深々と頭を下げると、由貴子は小さな溜め息をつき、優雅な微笑を湛えた。
「ちょっと話があって来たんだけど、いいかしら？」
「あ、どうぞどうぞ。部屋の整理も、ほとんど終わりですから」
太一が学習机の回転椅子を中央に引き寄せると、由貴子は一転、真面目な顔つきで腰を下ろした。
「太一君も座って」

「は、はい」
ベッドに腰掛けると、美熟女はやや沈痛な面持ちで口を開く。
「あのね。佳奈子との結婚のことなんだけど……」
その言葉を聞いた瞬間、太一は顔色をさっと変えた。
もしかすると、由貴子は二人の結婚に最初から反対していたのかもしれない。人の話を聞かない、猪突猛進型の父の意見に押し流されただけなのかも……。
太一は唾をゴクリと呑み干し、由貴子の次の言葉を待った。
「先月はあなたのお父さんの話につい同意してしまったけど、すぐに結婚というのはやっぱり無理があると思うの。互いにまだ高校生だし」
「そ、そうですよね。僕も同じことは考えていました」
「そこで提案なんだけど、婚姻届と同意書は私が保管しておくから、結婚は太一君が高校を卒業してからにしてくれないかしら？」
由貴子は二人の結婚を、決して反対しているわけではない。そのことを知った太一は、張り詰めていた緊張を解き放った。
「確かにおばさんの言うとおりだと思います。ちゃんと就職してから結婚したほうが、僕も恰好がつきますし」

「納得してもらえる？」
「はい。仰るとおりにします」
「あぁ、よかったわ。太一君が怒りだしたら、どうしようかと思ってたの。やっぱりあなたって、相手の気持ちを考えられる優しい男の子だわ」
「そんな、怒るなんて……。僕はてっきり、結婚を白紙に戻してほしいって言われるのかと思ってました」
褒められると、どうにも照れてしまう。思わず頭を掻いた太一だったが、由貴子はここぞとばかり言い連ねた。
「ううん、私はあなたたちの結婚には賛成よ。でも二人ともまだまだ若いんだし、この先どうなるかわからないでしょ？」
「ど、どういう意味でしょうか？」
「社会に出たら、佳奈子よりもかわいい女の子と出会うかもしれないわ」
「そ、そんなことありません。僕は絶対他の女に目移りなんかしないし、生涯佳奈子ひと筋です！」
「その気持ちはありがたいし、私も太一君のことは信じてるけど、結婚生活は好きという気持ちだけじゃ続かないものなのよ」

最後のセリフに、太一は言葉をグッと詰まらせた。
確かに就職したら、最初は仕事を覚えることで精一杯だろう。残業や仕事仲間とのつき合いもある。今のように、恋人と四六時中いっしょにいれるというわけにはいかないのだ。
甘えん坊の佳奈子が、果たして納得してくれるだろうか。人生経験未熟な自分に、しっかりとしたフォローができるかと言えば、どうにも自信が持てない。
太一が顔をしかめると、由貴子は上半身をグイッと乗り出した。
「それで私、考えたの。お試し期間というかたちで、同棲してみたらどうかなって」
「え？　こ、この家でですか？」
「そうよ。同じ家で毎日のように顔を突き合わせていれば、互いにふだんの素の姿を見れるでしょ？　幸い一階にはもう一つ部屋が空いてるし、そこに佳奈子を住まわせたらどうかと思ってるの。平日はこの家で、土日は二人とも母屋のほうに泊まるというのはどうかしら？」
由貴子の提案に、太一は小さく頷いた。
確かに、結婚してから初めて見えてくるものは多々あるに違いない。
法律上の婚姻を交わせば、簡単に「嫌になったので、もう別れます」というわけに

はいかないのだ。
由貴子の言い分は至極納得できるものだったが、太一ははたと思った。
(僕が二階に住んで、佳奈子が一階に住むんだよな。これって……果たして同棲と言えるんだろうか)
その疑問に答えるかのように、由貴子はさらに言葉を連ねた。
「それと佳奈子の……その……純潔は、結婚するまで守ってもらいたいんだけど」
「え⁉」
卒業するまで、あと十ヵ月近くある。それまで佳奈子とのエッチは禁止。これは性欲旺盛な少年にとっては、死ぬほどつらいことだった。
佳奈子は一人娘だけに、母親からすれば、当然の思いなのかもしれない。
由貴子が申し出た、不思議なかたちの同棲。その意味合いが、よくわかるというものだ。太一は、一瞬にして気色ばんだ。
「……どうかしら?」
由貴子は、少年の心の内を探るように顔を覗き込んでくる。
(嫌だと言ったら、やっぱり心証を悪くするよな。もしかすると、僕の佳奈子に対する気持ちが本物かどうか、確認したい意味も含まれているのかも。だとしたら……)

太一は意を決すると、顔を上げ、はっきりとした口調で答えた。
「わかりました。お約束します」
「そう！　よかったわ。じゃ、さっそく佳奈子に話してくる。あの子、きっと喜ぶわ」
由貴子は満面の笑みを見せ、小躍りするように部屋を出ていく。その姿を見送ったあと、太一は両肩をがっくりと落とした。
（これからは、一つ屋根の下で女の人三人と暮らすのか。その状況で佳奈子とのエッチ禁止じゃ、大変な思いをしそうだぞ）
おっとりタイプ、そして十九歳という若さで結婚した由貴子には、青少年の生理まではわからないのかもしれない。
ここ二、三日は引越の作業に従事していたため、自慰行為をしていないペニスが疼きはじめている。
太一は股間を見下ろしながら、ひたすら深い溜め息を洩らすばかりだった。

4

佳奈子の荷物は、翌週の月曜日までに母屋からアパートの一階へと移され、二人は

一風変わった同棲生活を送ることになった。
「ベッドは運ばないんだ」
「うん。こっちでは布団で寝るつもり。チェストも一つあれば十分だし。足りない物があったら、母屋に取りにいけばいいわ」
一番大きな勉強机は、すでに昨日のうちに運び込んでいる。荷物の整理を手伝う最中も、佳奈子は何度も抱きついてきて、作業は遅々として進まない。
「またぁ。これじゃ、いつまで経っても終わらないよ」
「だって……うれしいんだもん。太一君といっしょに住めるなんて」
「僕たち、まだ結婚したわけじゃないんだからね」
「わかってる。でも、うれしいの！」
晴れて夫婦になるまで、婚前交渉が禁止だということは佳奈子も知っているはずだ。それでも純真無垢な少女は、喜びを隠そうとはしない。早くも若奥さん気取りという感じだった。
（こっちは蛇の生殺し状態が続くってことが、わからないのかなぁ）
男と女の感覚は、やはり根本的に違うのかもしれない。まして佳奈子はまだ十五歳の乙女だけに、愛する人と暮らすというシチュエーションに酔っているようにさえ思

える。
実際、太一がアパートに引っ越してきてからの三日間、佳奈子はアパートに入り浸りで、食事や掃除などの身の回りの世話を自ら進んでしてくれている。
「これで……エッチがあったら、僕も不満はないんだけど」
「え？　何か言った？」
抱きついてきた美少女の肩越しで、思わず独り言を呟いた太一だったが、どうやら佳奈子の耳には届いていなかったようだ。幸福そうな笑顔を見せながら、口元に何度もキスを見舞ってくる。
「ちょ……ちょっと」
やや困惑顔、ややにやけ顔で顔を背けた太一の瞳に、部屋の入り口に立つ美希の姿が映り込んだ。
「お邪魔だった？」
「い、いえ。そんなことありません！」
慌てて身体を離すと、二十一歳の女子大生は、さも当てられたと言わんばかりに苦笑する。
「パーティーの準備ができたから呼びに来たんだけど、まだ部屋は片づいてないみた

いね。もうちょっと、あとにしたほうがいい？」
この日は和恵の提案で、二人の婚約を祝うささやかなパーティーが開かれる予定になっていた。由貴子と和恵はキッチンに立っていたが、どうやら料理もできたようだ。
「い、いや。荷物の片づけは、明日に回します。な？」
同意を求めると、佳奈子はやや頬を染めながらコクリと頷く。部屋の整理を中断し、二人は美希とともにリビングへと向かった。

その日の深夜、太一は佳奈子のことが気になり、どうしても眠れなかった。
下腹部がズキズキと疼き、肉筒はパジャマ代わりの短パンの中で突っ張っている。
（考えてみれば、引越の慌ただしさで、しばらく出してないもんな）
悶々としたまま寝返りを打ちながら、右手を股間の膨らみへ伸ばすと、ペニスは待ちきれないかのように熱い脈動を訴えた。
「だめだ。もう我慢できないよ」
ベッド下に置かれたティッシュ箱を取ろうとした太一だったが、その手がピタリと止まる。
（そうだ。朝は佳奈子がやってくるんだっけ）

朝の弱い太一はなかなか起きれず、佳奈子はそのあいだ、時間割を見ながら教科書やノートを学生鞄に入れ、ゴミ箱の中の紙くずなどを処分してくれるのだ。

自慰行為の後始末をしたティッシュを見つけたら、いったいどんな顔をするのだろう。精液の匂いを嗅いだだけで、その強烈さに卒倒してしまうのではないか。

「あぁ、どうしよう。こんな夜中に家を抜け出して、ティッシュを捨てにいくのも難儀だし」

自分の意志とは無関係に、股間の肉槍は怒濤のいななきを見せる。太一は自室の真下にいる、佳奈子の寝姿を思い浮かべた。

パジャマ姿で寝ているのか。それとも下着姿で寝ているのか。ひょっとすると、オールヌードで就寝しているかもしれない。

妄想が妄想を呼び、太一は暗闇の中で目をギラつかせるばかりだったが、いよいよもって我慢ができなくなった。

許嫁と一つ屋根の下で暮らしている男が、自慰行為で性欲を発散させるというのもおかしな話だ。脳裏に、佳奈子に手コキされたときの光景が甦ってくる。

初めて異性にペニスを触られた感触は、この世のものとは思えないほどの昂奮を与えてくれた。

もう一度、手でしてほしい。ありったけの精液を放出したいという願望が湧き起こる。

（そうだ。エッチさえしなければ、おばさんとの約束を破ったことにはならないんじゃないか？　佳奈子に頼み込めば、絶対にしてくれるはずだし！　問題は部屋に鍵がかけられているかどうかだけど……）

扉を何度もノックして、真向かいの部屋にいる美希に気づかれるわけにはいかない。

太一はベッドから下り立つと、忍び足で部屋の出口へと歩んでいった。

ドアノブをゆっくり回し、中からひょこっと顔を出す。廊下はシーンと静まり返り、物音一つ聞こえなかった。

和恵も、どうやら就寝中のようだ。廊下に足を踏み出すと、床がギシッと軋み、太一は額から脂汗をツツッと滴らせた。

忍者のような足取りで階段を慎重に下り、一階へと下り立つ。そしてリビングを通り過ぎ、廊下の一番奥へと歩を進めていった。

佳奈子と美希の部屋の前で立ち止まり、耳を澄ますも、やはり物音は何一つ聞こえてこない。

（二人とも寝てるみたいだ。頼む！　鍵は外しててくれよ）

許嫁の部屋へ身体を向けると、太一は息を潜め、緊張感に包まれながらドアノブに手をかけた。

回しながら軽く押すと、扉は音もなく開き、隙間からナツメ球のオレンジ色の照明が漏れてくる。

（やった！　鍵はかけてないぞ!!）

太一は歓喜に打ち震えながら、室内を覗き込んだ。

腹部のあたりにタオルケットをかけた佳奈子が、くの字の体勢で布団の上に寝転がっている。耳に届いてくる軽い寝息は何とも愛らしかったが、それよりも太一の視線は愛しい美少女の下半身へと釘づけになっていた。

色は薄桃だろうか、ホットパンツがまん丸のヒップにぴったりと張りつき、臀部の形状を際立たせている。臀裂の位置まではっきりとわかり、まるで新鮮な桃を見ているようだったが、肉づきのいい太腿がさらに少年の性感を煽りたてた。

その場で飛びあがりたい心境を自制し、後ろ手でドアを閉めながら、小さな深呼吸を繰り返す。佳奈子の寝顔を見るために回り込むと、今度はタンクトップ越しのバストが瞳を射抜いた。

（横向きの体勢で寝ているせいか、む、胸の谷間がすごいや！　ふるふるしてて、柔

らかそう。タンクトップから、今にもこぼれ落ちてきそうだぞ）

少女は双眸を閉じ、口を微かに開けている。ぷっくりとした唇を見ているだけで、吸いつきたくなるほどだ。

太一は喉をゴクリと鳴らすと、再び佳奈子のヒップ側へと回り込んだ。

四つん這いになり、丸みを帯びたヒップとむっちり太腿に顔をそっと寄せていく。

（あぁっ、肌から甘い香りが漂っている。女の子って、どうしてこんなにいい匂いがするんだろう）

ボディシャンプーなのだろうか、ココナッツミルクのような芳香にうっとりとした太一だったが、その直後、心臓をドキリとさせた。

臀裂の真下に位置する、ひと際ふっくらとした膨らみ。こんもりとした恥丘に、目がギラついてしまう。鼻を近づけ、犬のようにクンクンと匂いを嗅ぐと、その部分だけ汗混じりの甘酸っぱい媚臭が鼻孔を貫いた。

脳幹が痺れたように疼きだし、完全勃起の肉槍は、短パンの布地を突き破りそうな昂りを見せている。

（も、もう我慢できないよぉ）

太一は太腿のほうから鼻を擦り寄せ、乙女の体臭を目いっぱい吸い込んだ。

右手が自然と自らの股間に伸び、短パンの上からペニスをギュッと鷲掴みにしてしまう。

やがて美少女の恥部へ辿り着いた鼻先が、マシュマロのような弾力を捉えると、太一は目をとろんとさせ、恍惚とした表情を浮かべた。

（あぁぁっ。ホットパンツの上から匂いを嗅いでいるだけなのに、どうしてこんなに昂奮するんだろう）

少女の恥臭が、まるで媚薬のように少年の脳髄を蕩かせていく。やや顔を上げ、太一は指で膨らみをそっと押し込んだ。

指先を押し返すような触感を覚えた刹那、佳奈子の太腿がピクリと震える。次の瞬間、枕元に置いてあった電気スタンドの照明が灯され、太一は慌てて上体を起こした。

「た……太一君」

「あ……起こしちゃってごめん。どうしても寝れなくて」

佳奈子は仰向けになると、切なそうな視線を向けてくる。

「実は私も……なかなか眠れなかったの」

「え？　それじゃ、最初から起きてたの？」

コクリと頷く美少女に、猛烈な愛くるしさを覚えてしまう。佳奈子は、おそらく太

一が忍んでくることを予想し、鍵を外しておいたのだろう。
（佳奈子も、僕と結ばれることを望んでいたんだ）
性欲一色に染められた太一は、そう思い込むと、覆い被さるようにふっくらとした乙女の身体に抱きついた。
股間の膨らみを太腿に押し当て、盛りのついた犬のように腰を動かしてしまう。
「あンっ、太一君。だめよ、待って。ママの信頼を、裏切るようなマネはできないわ」
胸を押し返されると、太一はさも心外といった顔つきをした。
「ど、どうして？　僕が来ることを知ってて、鍵を閉めなかったんでしょ？」
「そ、それは……ただ話ができたらなと思って」
佳奈子の言葉が焦らしの効果を与えているのか、性衝動がぐんぐん上昇していく。
「僕、もう我慢できないよ！　エッチさえしなければ、いいわけでしょ？」
「そ、それはそうだけど……」
少女の言葉を最後まで聞かず、太一は中央に仲良く寄り添うメロンのような乳房に手を伸ばした。
「あ……ンっ！」
柔らかい肉房が、手のひらの中で楕円に形を変える。ブラジャーは着けていないよ

うで、指先は明らかに乳首の尖りを捉えていた。
（タンクトップの上からでも、おっぱいの感触がはっきりと伝わってくる。何て柔らかいんだろう。ああ、乳首もこんなに勃っちゃって）
「ふ、ぅン……だめっ」
佳奈子は眉根を寄せ、腰を微かにくねらせている。鼻にかかった吐息を聞く限り、決して嫌がっているとは思えない。
太一は目を充血させながら、ふくよかなバストを荒々しく揉みしだいていった。
「だめ……だったら。あ……ぅン」
頂上の尖りを指先でいらい、胸の谷間に顔を埋める。そして頃合いを見計らって、右手を肉づきのいい下腹部へと伸ばした。
股の付け根に手を潜り込ませた瞬間、湿った温もりが指先に伝わってくる。
（ひょっとして、これって濡れてるんじゃないか⁉）
ポッポッと火照った中心部に手のひらを合わせながら、太一は狂おしそうに顔を歪めた。
エッチはしないと決めていたものの、このままでは止まりそうにない。
ブレーキの壊れた暴走機関車のように、太一は小鼻を開きながらホットパンツの縁

に手をかけ、パンティごと剥き下ろしていった。
「あっ！」
佳奈子の小さな悲鳴は、まったく耳に届かない。楚々とした絹糸のような恥毛が目に飛び込んでくると、いよいよもって少年の性感はマックスへと到達した。
乙女の大切な部分を、見られたくはないのだろう。しっかりと足を閉じているせいで、かえってパンツは脱がせやすい。
佳奈子が不安そうに見つめる中、ピンクの布地を足首から抜き取り、太一は息せき切ってY字ラインの中心部に指を滑り込ませた。
「あ、やっ」
ヌルッとした粘液が指に絡みつくと同時に、縦筋に沿って指先をなぞりあげる。
（あぁぁっ！　ぼ、僕、佳奈子のおマ〇コを触ってるんだ!!）
ピチュクチュと愛液の跳ねあがる音が聞こえてきた直後、佳奈子は呻きながら上半身を弓反らせた。
「はぁぁンっ。……太一君」
「佳奈子、好きだ。大好きだよ」
割れ口を指で蹂躙しながらキスをしようとすると、美少女は目を潤ませながら赤い

唇を開いた。
「手で……また手でしてあげる」
「え？　でも……」
できれば、このまま一つに結ばれたい。気持ちはもう情交へと飛んでいたが、佳奈子の次に放った言葉に冷静さを取り戻していった。
「真向かいの部屋には、美希お姉ちゃんがいるんだよ。バレたら、大変なことになっちゃう。せっかくの初体験なんだし、嫌な思い出にはしたくないもん」
確かに、佳奈子の言うとおりだった。
少女にとっては、もっとロマンチックなシチュエーション、落ち着いた雰囲気の中で初体験を迎えたいだろう。まして童貞の太一では、うまくリードしてあげられる自信もない。処女膜を破ったときに、大きな悲鳴でもあげられたら……。
その図を想像した太一は、背筋に冷たい汗を滴らせた。
手コキだけでも、多大な快楽は得られるはず。太一はコクリと頷くと、股間から指を抜き、佳奈子のとなりに仰向けになりながら短パンを下着ごと脱ぎ下ろしていった。
勃起が激しい勢いで下腹を叩き、鈴口から溢れ出した前触れの液が扇状に翻る。自分でも驚愕するほどの怒張ぶりだ。

佳奈子は上体を起こすと、太一の下腹部に移動し、剛直に指を巻きつかせた。
「……すごい。ドクドクしてる」
「あぁ、佳奈子。気持ちいいよぉ」
指の律動はまだ開始していないにもかかわらず、肉胴に走った青筋がビクビクと脈動する。カウパー氏腺液は、まるで源泉のように先端の割れ目から滲み出していた。
「はぁぁぁっ」
ゆったりとしたピストンが始まると、思わず腰をくねらせてしまう。包皮が雁首を往復していく刺激が何とも心地いい。顔を左右に振り、女のような悶絶姿を見せると、佳奈子の様子も徐々におかしくなってきた。
顔を真っ赤にし、息苦しいのか、バストが大きく起伏する。唇を舌先で何度もなぞりあげ、首筋にうっすらと汗の皮膜を纏わせる。
半開きになった口から熱い溜め息が洩れてくると、佳奈子は切なそうな顔を太一に向けてきた。
「太一君のおチンチン、すごくいやらしい。なんか……私、変な気持ちになってきちゃった」
吐息混じりに告げたあと、美少女は突然上半身を屈め、さくらんぼのような唇を怒

張に近づけてくる。太一が（あっ）と思った瞬間、亀頭の先端は佳奈子の唇のあいだに挟み込まれていた。

「あぁぁぁぁっ！」

チュッチュッと軽いキスを浴びせながら、ソフトクリームを舐めるように、小さな舌を先端に這わせてくる。それは稚拙なフェラチオだったのかもしれない。だが愛する恋人から口唇奉仕を受けているという事実に、太一は感極まった。

（か、佳奈子が、僕のおチンチンをしゃぶってる⁉　信じられないよ！）

生温かい口腔粘膜と唾液が、ペニスをしっとりと包み込んでくる。舌先が裏筋を這い回ると、太一は肉筒全体が蕩けそうな感覚に襲われた。

白濁の塊が、深奥部で怒濤のように荒れ狂う。一刻も早く欲望の証を放出したかったが、少女の繰り出す口戯は、なかなか射精願望を頂点にまで導かない。

太一は息を荒ぶらせたあと、上体を敷き布団から起こした。

「や、やっぱり、もう我慢できないよ！」

「きゃっ！」

佳奈子を押し倒し、大股を開かせて割れ口に亀頭を押し当てる。

美少女は顔を横に振り、今度は拒絶の言葉さえ発しない。彼女自身の性欲も、のっ

ぴきならぬ状況にまで追いつめられているのだろう。その姿からは、覚悟を決めたという思いがひしひしと伝わってきた。

太一も満を持してペニスを握り込み、挿入口を探す。ところが手元が暗く、どうにもよくわからない。

（あれ、いったいどこにあるんだろう？　暗くてよくわからないよ）

ペニスを上下に動かし、腰をチョンチョンと突き出したものの、ペニスは膣の中へといっこうに入らなかった。

「もっと……下」

「え？」

膣口は縦筋の上か中心部にあるかと思っていたのだが、意外にもまさか下側にあったとは。

「こ、ここ？」

目を丸くしながら亀頭の先端を下方へ向けると、ひと際窪んだ箇所に突き当たる。

（間違いない。ここだ！　いよいよ一つに結ばれるんだ!!）

太一は唇を真一文字に引き結び、全神経を下腹部に集中させた。

乾坤一擲、まさに腰を送り出そうとしたその瞬間、突然部屋の扉が開け放たれる。

「えっ!?」
太一が驚愕の表情で肩越しから振り返ると同時に、ペニスは淫裂の上を上滑りし、裏茎が愛液で濡れそぼった媚肉に擦りあげられた。
電撃に貫かれたような快美が、少年の全身を一気に走り抜ける。
「あ、あ、あぁぁぁぁっ！」
「きゃぁぁぁっ!!」
部屋の入り口には和恵と美希が佇んでいたが、鈴口から発射された精液は放物線を描き、佳奈子の口元から首筋、胸元へと大量に降り注いでいく。およそ三日ぶりの溜まりに溜まった牡のエキスは、飽くなき間欠を延々と繰り返した。
「はい、そこまでよ。私たちは、お姉さんから監視役を頼まれてるんだから」
和恵の言葉が、子守唄のように頭の奥へ響いてくる。太一は虚ろな瞳のまま、右手で股間を隠し、途切れ途切れの言葉を返した。
「か……監視役って……いったい」
「平日は私たち、土日はお姉さんが監視する役目なの。そういうことだから、申し訳ないけど、太一君は自分の部屋に戻ってね」
「ひ……ひどいですよ。気づいていたなら、もっと早く止めてくれればいいのに」

「あら？　私たちだって、本当は野暮なことはしたくないのよ。多少のことだったら目を瞑ろうねって、美希ちゃんとも話していたんだから」
美希は室内に一歩足を踏み入れると、うれしそうな悲鳴をあげる。
「やだ、すごい量。こんなに出しちゃって。佳奈ちゃんは、シャワーを浴びたほうがいいわね」
美少女は目を瞑ったまま、精液の洗礼を浴びた顔を横に背けるばかりだった。
二人はまだ結ばれてはいなかったが、佳奈子の言うとおり、まさにとんでもない初体験になったといっても過言ではないだろう。
（佳奈子……ごめん）
太一は口をへの字に曲げ、ただしょんぼりとするばかりだった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

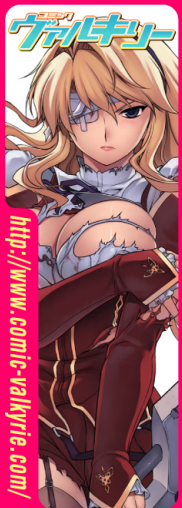
※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁でではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!